



新潟の水辺だより

Vol.55

●編集発行 特定非営利活動法人新潟水辺の会●発行日 2002年4月17日 Vol.55

NPO法人になりました。

法人化までの経緯

3月6日に新潟地方法務局に書類が受理され、無事NPO法人（特定非営利活動法人）になりました。振り返れば、1999年10月の水辺シンポジウムで法人化への提案や議論が交わされてから2年以上がたちました。その間、2000年1月には「NPO法人化の是非を問う」と題して相楽世話人が水辺の会の役割や将来イメージとしての具体的提案がされ（水辺だより50号）、春には会員に対してアンケート調査を行い、法人化に対する疑問点や理解しにくいという指摘もありましたが、6割が賛成という結果でした。（同51号）

そして、2001年2月から毎月2回、プロジェクト会議を行い、定款作成など具体的な事務作業を進め、それらをまとめて、7月に設立総会を開きました。総会では設立趣旨案や定款案などについて審議し、登録申請することが確認されました。それらの具体的な内容を「NPO法人化に向けて」と題して同54号に発表しました。時間がかかり過ぎという意見もありましたが、270名の会員の理解と同意を得ること、すでに活動している団体のため特に支障がないこと、事務局の怠慢？などのため今に至りました。会員の皆様ありがとうございました。

事務局体制について

事務局を大学南（(株)グリーンシグマ内）から関屋（(株)サザンウインド内）へ移しました。5月からは更に河渡（(株)サザンウインド内）へ変わります。

運営も今まで通りトップダウンではなく、みんなで作ってゆく会として、理事（会では世話人と呼ぶ）が47名という異例のNPO法人になりました。（普通は5～10名）

その世話人で構成する担当スタッフを紹介し

ます。

代表：大熊孝、副代表：梶瑤子、星島卓美、進直一郎、事務局長：相楽治、事務局次長：杉山泰彦、菅野隆之、会計：森本利、総務：大崎信子、戸枝邦子、水辺だより編集長：高橋正良、ホームページ編集長：杉山、情報担当：香田和夫、香野哲大、渡辺真夫、企画担当：安田幸弘、横山通、香野、野田坂智恵子、岡田真純、川舟企画：石月升、横山、高橋裕雄、風間善浩、国際交流：大熊宏子、香野、野田坂、岡田 です。

定例世話人会を毎月第4水曜日午後7時から新潟市関屋地区公民館で行っていますので会員の方ならどなたでも気軽に御参加下さい。

今年の事業計画は

具体的な活動予定は各々お知らせしますが、事業計画をあげておきます。「PR情報」ホームページ運営と水辺だより発行。「法人化記念事業」会紹介パンフレット作成と板合わせ（川舟）導入、現在舟の購入計画中、秋に法人化記念セレモニーを企画しています。「ウォッチングお楽しみツアー」田上梅もぎツアー（6/23）、菅名岳登山。「協働事業」花いかだ（5/3）、通船川草刈り隊（6/30,9/29）、Eポート大会、佐潟ハス採り大会（10/6）、長野県新潟県合同研究会。「支援事業」堀割再生物語プロジェクト、子ども環境会議。「ネットワーク事業」にいがた市民環境会議、新潟県環境NGO大会、水環境全国シンポジウム、水郷水都全国会議、全国川の日ワークショップ、どんつき祭り。

以上のように今年も色々活動の場が広がっています。「考える会」から「責任を持つ会」へ、会員をはじめ、皆様の活躍を期待します。

森本 利

『水辺シンポジウム2001』報告

2001年12月15日『水辺シンポジウム2001』は、午後新潟市東地区公民館ホールにて開かれ、今年度の『にいがた水辺賞』は牡丹山小学校に決まった。



通船川を大切にしたいと発表する
新潟市立牡丹山小学校の皆さん

特別対談は『舟の走る川のまち』として、大野町の梅八造船所・小林梅八氏と、かつて通船川で板合わせを漕いでいた新町在住の大橋勤氏の話をお聴きした。

このところ20年程舟作りは行ってないとのことであるが、月に三隻も舟作りをしていた時でも図面なしで舟は作ったとの事であった。人の記憶だけによる職人芸の偉大・確かさを感じながら、技術の継承の危うさを感じたのは私だけであろうか。

その後2001年活動のドキュメント報告が行われた。今年の特徴は、何と言ってもインターネット博覧会（インパク）に出店したことであろう。約17,000ものアクセスがありインパク出展者ベスト4に輝いた。（私もその内の30回カウントされている）

各種の活動報告を紹介するときりがなが、花筏、信濃川Eボート大会、佐潟

ハス採り大会、阿賀野川流域連携、通船川松崎地区WS、子ども環境会議など30もの活動報告が、3分と限られた時間を最大限に使い発表された。

報告を聴いて感じたことは、効率と経済が最優先され、立ち止まってものを考えることを忘れ、先へ先へとあくせく生活する私たち。

『かつて、路地と水辺は身近にあった』が、生活の近代化の中で失われ、ようやく気づき始めた私たち。



川舟職人の人生を語る梅八さん

昨日のものを今日に引継ぎ、明日に伝える伝統を、古臭いと切り捨てている私たちが浮き彫りになっていった。

環境を考えた中で水辺の再生を願う人が多く、かつ多彩な切り口を持った人の多いことか。こんなことを考えながら、アナスタシア号の望年会へと足を急いだ。

加藤 功

阿賀野川 食談議・旅談議に参加して

私が初めて会津へ行ったのは、小学校6年の修学旅行でした。

もちろんSLで行って、東山温泉に一泊しました。

飯盛山、白虎隊「戦雲くらく、日は落ちて・・・」は2番まで歌えます。



阿賀野川を旅した（横切った？）歴史上の人物について語る金森 敦子さん

去る2月2日（土）北方文化博物館にて行われた『阿賀野川 食談議・旅談議』に参加してきました。

新潟食の陣実行委員会と阿賀野川・磐越道連携会議が主催するもので、スローな食、スローな旅をテーマに福島・新潟県境を越えて、阿賀野川流域の交流を楽しくしようというものです。

「食談議」講師の鈴木真也さん（会津の郷土料理研究家）のお話を聞きながら、その頃の東山の風景を思い出しました。

その後も会津へは何度も出かけています。昔の道は舗装なしの曲がりくねった道で、会津は今よりずっと遠くにありました。

「旅談議」の中で金森敦子さんが話された古事記の時代の旅人大毘古（おびこ）が通った道はどんな道だった

のでしょうか。



こづゆのだしはスルメが使われている。見た目は似ているが、具や風味が異なるところが面白い。

阿賀野川伝いに分け入って峠を越えたのか、それとも川を舟で上がった（下った？）のか・・・

「川と街道の育む文化」古事記の頃から現在までを川と街道が繋いでいる。ということであらためて認識させられたフォーラムでした。

談議の合間に出された、のっぺとこづゆ（会津版ののっぺ）、津川の甘酒、なた漬け、ニシンの山椒漬けと、もう大満足。とても楽しい一日を過ごすことができました。

会場の北方文化博物館はしばらく行かないうちにすっかり整備されていて、レストラン「ウイステリア」は建物の雰囲気もいいし、パスタもおいしかったのですが、裏門から見たあのうっそうとした杉林、竹林とその間の堀のあたりの景色が全部なくなって（堀はありますが）ちょっと残念な気がしました。

三原 エミ子

柳川堀割—有明海体験ツアー その1

私が、この会に入会して半年になる。顔を出さずきっかけは、何気なく開いた新聞に「堀割再生へ市民の関心を」と新潟日報に載った記事を見たからだ。



堀や水への情熱を語る広松氏

私は、以前から新潟には堀がなくては、と常々思っており、早速、代表の堀川さんに連絡を取り、何とかしてプロジェクトの会議に参加させてもらったのが、平成13年9月の下旬だった。それから、11月18日の第1回、翌14年2月17日の第2回「にいがた堀割・堀端会議」シンポジウムに参加した。あっという間の出来事であった。この2回のシンポジウムを通して感じたのが、堀に思いを寄せている人々がこれほどにいるのかということ、また、実際に堀といっても歴史的にはどのようであったか、そして埋め立てられていったのかあらためて知った。

第2回「にいがた堀割・堀端会議」シンポジウムに、スタッフとして参加して、幸いにも広松 伝氏にお会いする機会を得た。広松氏は柳川の人で、簡単に言うと柳川の堀を再生した人、その他にいろいろとご活躍中の人である。どんな人が想像できないまま話をしてみたところ、思いがけず氏からの誘いがあり、柳川へ鯉を釣りに行くことになった。3月22日から24日にかけて、我々の代表の堀川と2人で柳川入りした。広松氏は忙しい中、西鉄柳川駅まで迎えてくださった。その

晩は、氏が有明海学校で使う（今回我々の宿）、柳屋で宴会になった。会は、私と堀川、広松氏と柳川水の会の山口氏と4人で、お互いのお国自慢で盛り上がった（写真参照）。

翌朝は、明るくなった6時頃に、氏の舟のある船だまりに行き、いざ、有明海に釣りに出かけた。船だまりといっても町中にあり、柳川の堀に水を供給している沖端川が水を供給した後に船だまりとして使われているのである。残念なことにその日は、干満の差が1m程しかなく、船だまりには、ほとんど水がない状態で、あの5-6mもの海面の差は見ることができなかった。船だまりは、どの舟も舟を囲んで6-7mの棒が4本打ち込んであり、舟は、その棒にロープで止めてあった。



柳屋にて

左から柳川水の会山口氏、堀川氏、川崎、広松氏

また、ハシケもその日に限っては、舟から4m程上にある状態だった。つまり本当の満潮のときはその高さまで水面が上がると言うことで、それらの棒は、干満により浮き沈みする舟が流されないようにする工夫である（梅雨時の満潮時には船だまりの水が溢れんばかりになるそうである）。その日は、快晴であったが、北風が強く、荒波でなかなか鯉は釣れなかったが、始めに氏が、続いて堀川が釣り上げた。私は、寝不足気味、船上でコックリをしていた。結局、6時間で2匹しか釣れず、あきらめて船だまりに戻った。

舟を降りて（実はハシケまで登るのだが）、



柳川堀割—有明海体験ツアー— その2

6時間の舟揺れで足元がおかしくなった私が、ハシケから土手に足をかけたところでバランスを失い、見事、4m下に落ちてしまい、泥んこになった。それから、私が氏の家の風呂に入れてもらい、奥さんに洗濯してもらっている間、堀川が氏のバイクで、柳屋まで私の着替えの服を取りに走るなど、すっかり広松氏（堀川さんにも）には、お世話をかけてしまった。おかげで、氏にもう少し深く接することができ、氏が、いかに水を大切にしているか、また、研究しているか、そして、活動しているか肌で感じることができた。

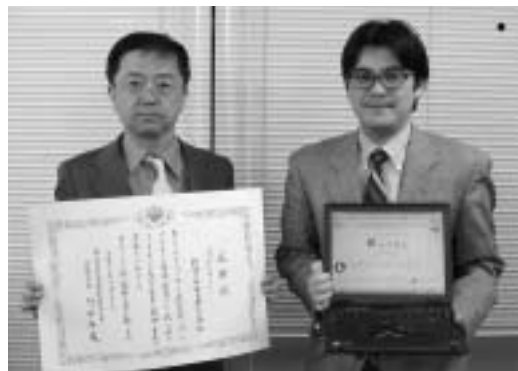
落ち着いたところで、待望の川下り、実を言うと今回は川上りをしてきた。氏ならではである。舟に乗ると景色は一変する。堀川のこぼれんばかりの笑みが忘れられない。よほど気に入ったらしい。太いところは15m、細いと50cmくらいと実にさまざまな堀が、柳川には、72kmにもおよんで張りめぐらされている。堀川とともに、「あんな感じの堀が、新潟にあるといいですね。」などと話しながらの2時間だった。舟を降りてから、宴会まで(その日は広松邸で)時間があるとのことで、私と堀川は、白秋記念館そばの堀割で時間を過ごしたが、堀川は、堀割と街並みがよほど気に入ったのか、1時間ほど写真を撮りっぱなしだった。

その日も大いに飲んで、翌朝、氏にお別れをした。柳川の堀と有明海とは、密接に関係しあいながらあることが、体を張って感じられた柳川ツアーだった。そして、我々の代表の堀川氏も堀、街並みに関する思いは、熱く、また、楽しんでいる姿は、頼もしかった。広松氏の言葉「物事は、楽しく、ゆっくりと、そして、あきらめず」もまた、身に染みたツアーであった。

堀割再生物語プロジェクト実行委員会
川崎 隆 (寄稿)

インパク 「応援ありがとうございました。」

2000年12月31日から開催のインターネット博覧会（通称インパク）も2001年12月31日で終了しました。新潟の水辺を考える会も特定パビリオンとして「川とくらし」のパビリオンを出展させていただき、1年と1日をなんとか乗り切り、無事終了することができました。



応援・宣伝ありがとうございました。

編集鳥：高橋正良（左）、Web Master：杉山（右）

会期中はおよそ25,000の方がこのパビリオンを訪れてくださいました。また、11月には、インパクパビリオン全体の中で社会貢献ランキング7位にランクインすることができました。

宣伝や情報収集、そしてご来場いただいた皆様に、厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。

引き続き一部のコンテンツは公開していきたいと考えておりますが、法人化にともないホームページを公開するサーバの運用について事務局で検討している最中です。予算の面で可能であれば、独自のドメインを取得し、そこで運用をしていきたいと考えています。

インターネットの利用コストはまだまだ高く、使い方も難しい面もありますが、生活のリズムなどが様々な人々が関わっている私達のようなグループには強力なツールです。どんどん活用していきたいと考えています。

Web Master 杉山 泰彦

ラムサールシンポジウム in 新潟開催報告

昨年秋ラムサールシンポジウム in 新潟が開催された。国、県、市と海外の講師の関係調整など事務局の新潟市環境対策課が事務局の中心をにない、私たち水辺の会だけでなく、野鳥の会ほかさまざまな方々のご協力の元で新潟地域実行員会が結成され、お手伝いをした。この場をお借りしてご協力いただいた方々にお礼を申し上げます。



1回目とは正反対に好天に恵まれ、エクスカージョンも快適に行えました。

シンポジウムの内容は「湿地」をめぐる広範囲な生態系に関する国際的な研究内容の発表やボランティアの活動紹介であった。詳細報告書は現在印刷中であるのでここでの紹介は省略する。

私にとって、興味深かった話題は野鳥に対する餌づけの問題であり、このような話題が取り上げられる意義は大きいと考える。正面切った取り上げられ方ではないものの、人間と野生生物のかかわり方の本質に触れる問題であ

り、慎重に扱われたのは当然のことと思う。嬉々として餌をやり、野生生物を観光資源に利用しようとする考え方に一石を投じることができれば、今後の影響は大きい。

また、田んぼが担う人間と野生生物との媒体機能といった話題も豊富にあり、トキの増殖とやがて表面化する放鳥の問題も扱われたシンポジウムは、私にとってタイムリーなものであった。

開催に至るまでの行政と市民団体との協力体制には一部コミュニケーション不足が指摘されたものの、紹介した二つの話題などがそれ代わって充実感を与えてくれたシンポジウムであった。

ラムサールシンポジウム
新潟地域実行委員会
高橋正良

事務局移転のお知らせ

- 4月22日より事務局連絡先が移転します。
- 新しい住所
- 〒950-0024新潟市河渡2-2-8
- 電話 Fax (兼用) 025-270-9207
- メール:
- mizubenokai@southernwind.co.jp
- アドレス帳などの書き替えをお願いします。

川舟板合わせのカンパのお願い

3月30日、越後の銘酒朝日山を出している朝日酒造がホテルの棲む環境づくりをしながら、『財団法人こしじ水と緑の会』を発足させました。その財団の助成事業として、30万円上限で15団体に年450万円を支援するというので、当会の川舟「板合わせ」を購入する助成を申請しました。



3月30日の助成事業の認定の様子

タイトルは「舟の走る川の再生へ向けた老船頭と子どもの川舟漕ぎ体験と交流活動」と少し長いものです。期間は来年9月30日まで18ヶ月間で、途中中間報告をします。申請は次のような内容にしました。

ドブ川の再生のために川掃除、川緑化、川遊び、川学び、川草刈も数年間してきましたが、日常的に人々の暮らしの中で川への関心を引き出すのです。

多くの人々が持続的に長い時間川と接するためには誰にも心地いい水上利用の生活を復活させることです。それはカヌーや筏漁船などで何度か試みたがスポーツの域を出ていません。

もっと濃密な川と人々との関係づくりには、自ら舟を漕ぎ川と会話を交わす、格闘することが不可欠だ、と考えました。

幸運にもかつて川舟をマイカー代わりに操り、川舟ならいつでも自在に漕げると豪語する熟練の川老師たちが高齢だが沿川に

健在しています。

一方、「良い子は川で遊ばない」という教育指導の中で小中学校の総合的学習活動に地域の環境としての川とのふれあい、学習を促そうと“子ども環境会議”の活動が始まっています。

そこで、活動を「川老師の操船や川経験」をこどもたちの感動体験学習に生かす“川舟老学交流”を船上で実現し、本来の川の感動と魅力伝えることとしました。それをを楽しみ見守る教師や父母、住民が“川で体験共有した時間”こそ川の再生を図る最も近道と考えました。「板合わせを注文し川を生かす川業に使う」ことにしました。乞うご期待です。

ここで重要なことは、漕ぎ方を伝えるのではなく、漕ぎ方を身に着けるまでの川との付き合い、すなわち遊び、泳ぎ、休み、舟に乗り、漕ぎ、魚を取り、鳥を追った話、物資や客を積んだ大きな外輪船が往来していてその波を恐れた話、雪で道路が不通で産気づいた奥さんを舟で病院まで運んだ話、水害や新潟地震で川がどうなったか、98年の84水害で川がどんな役割を果たしたか、今通船川が全国的な川再生運動の注目を浴びていることなどを漕ぎながら話してもらおうことです。

老船頭師の誕生物語を川そのものに触れない子供たちが聞いたとき感動があるか、カルチャーショックがあるかが大きな分かれ目だが漕ぎ方だけの体験なら、川舟である必然性はないとも思っています。

相楽 治

Information

イベント情報

ドキュメンタリー映画「阿賀に生きる」10周年記念祭

2002.4.20～26 記念映画祭

会場：シネウインド 入替制・当日1200円

4.28～5.6 10周年記念それぞれの阿賀展

会場：新潟県立「環境と人間のふれあい館」 無料

2002.5.4 10周年記念集会 安田町中央公民館 無料

問合せ：新潟・市民映画館シネウインド025-243-5530、文化現場 025-270-0544

2002.4.21(日) 春の野草つみとトゲソウの観察会&講演会

午前9:00～ 場所：五泉市立図書館 3F小ホール(五泉市郷屋川1丁目 0250-43-3110) 参加料 無料

問合せ：025-211-0010 風間

2002.4.29(火)・みどりの日) 春の菅名岳登山

大蔵山駐車場(村松町) 9時集合

問合せ：和田 0250-23-0820(土・日にお願ひします)

2002.5.3(金)・憲法記念日) 花筏(はないかだ)

10:30頃から柳都大橋誕生祭会場にて(柳都大橋橋上)

問合せ：025-241-4119 新潟市東地区公民館

2002.5.5(日)10:00～17:00 第27回「火消し祭り」

第1会場 やすらぎ堤(りゅーとび駅前)、第2会場 万代シテイ

時代行列、梯子乗り、スポーツ・食・音楽の祭典

問合せ：火消し祭り実行委員会 025-260-1203

2002.5.18(土) 親子魚釣り大会

問合せ：星島 025-274-2891

2002.5.25(土) 通船川クリーンアップ

午前9:30～11:30 問合せ：星島 025-274-2891

2002.5.25～26(日)

長野県新潟県合同研究会「千曲川信濃川孝流会」

新潟駅南9時集合/会場：秋山郷「萌木の里」雪国の森研究所/参加費：研究会・懇親会・宿泊 10,000円(交通費は各自・実費負担)

テーマ「流量が変動する川の本来の生態系について」

基調発表 香野哲大：基調講演 桜井善雄：研究発表 小林正登・長田 健：活動発表 風間善浩

問合せ：025-211-0010 森本/相楽

2002.6.8(土) 栗の木川公園草刈り

問合せ：新潟市・公園水辺課 025-228-1000内線2832

2002.6.30(日) 通船川草刈り隊

集合午前9:00 問合せ：横山 025-276-2254

編集後記

やっとのことで法人化した水辺の会に早くも二つの障害が生じている。一つは事務局を引き受けた私の事務所の移転である。皆さんには誠に迷惑ではあります、お許しください。

もう一つは世話人(理事)の数の多さである。実際の事務手続きには50人あまりの世話人の多さは大変である。しかし、水辺の会らしく、これも楽しみな

がら進んでいくということでご協力お願いします。

編集鳥 高橋 正良

法人化への準備や手続き等の関係で発行が遅れました事をお詫びいたします。

編集部一同

入会案内

この会は、遊び心半分・真面目心半分で活動しています。ウォッチングには、家族ぐるみで子供達も一緒に参加したりしています。

自分の足で水辺を歩くなりして、自分でも感じたことから、自分の水辺を発見していく、あるいは考えていくことを大切にしています。

今までは違った視点から、あらためて自分の身の回りに目を向けて見ると、同じものを見ているのに今までは違うものに見えてきます。新しい発見があります。自分の世界もまた少し広がってきます。

この会も色々な分野の人達が集まって、それぞれの世界がもっと広がっていくような出会いの場を提供できる会にしたいと考えています。あなたの参加お待ちしております。

■設立年：1987年10月10日 ■目的：水辺に関わる自然、歴史、文化、生活、風俗、スポーツ、レクリエーション並びに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的とする。 ■代表者：代表 大熊孝(新潟大学工学部教授) ■会員数：個人276名・法人16団体(2002年04月現在) ■活動：水辺シンポジウムの開催/水辺ウォッチング/会報「新潟の水辺だより」の発行/水辺環境整備に関する学習会/長野県富山県の水辺グループとの交流会/通船川、佐潟の調査・研究etc.

■年会費：個人会員一口1,000円を2口以上、賛助会員(法人など)一口5,000円を2口以上

●発行：特定非営利活動法人 新潟水辺の会

●事務局：〒950-0024 新潟市河渡2-2-8

Phone 025-270-9207

Fax 025-270-9207

(4月22日より上記へ移転となります。)

e-mail: mizubenokai@southernwind.co.jp

ホームページ

http://www.southernwind.co.jp/mizube/

入会申込書

年 月

フリガナ 氏 名	男・女
	歳
特技や 水辺への想い	メールアドレス
住 所	〒 () -
職 業	
勤務先	〒 () -

注) 紙面の都合上、縮小しています。
250%程度拡大コピーをしてご使用下さい。